

台湾侵攻9

ドローン戦争

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

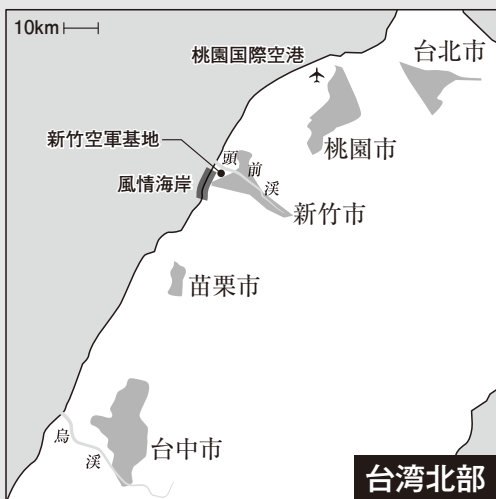
ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

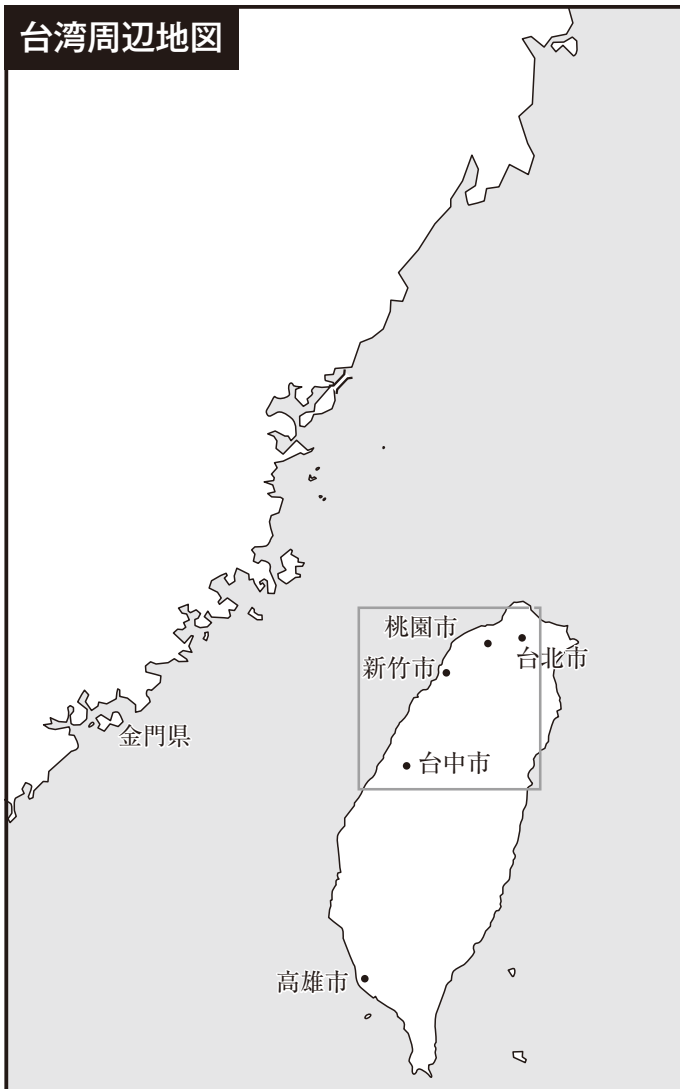
口絵・挿画
地図 平面惑星
安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 ロボット犬	19
第二章 天気予報	41
第三章 中国大返し	69
第四章 桃園沖海戦	98
第五章 兵貴神速	124
第六章 即応機動連隊	147
第七章 風の神	169
第八章 キル・ゾーン	193
エピローグ	206



台湾周辺地図



登場人物紹介

◆日本

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

どもんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。

《原田小隊》

はらだたくみ
原田拓海 一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。コードネーム：ファーム。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口心太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。田口のスポッターを自称。コードネーム：ヤンバル。

《姜小隊》

かんあやか
姜彩夏 三佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課。

いかける
井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

《水陸機動団》

しみづか ウィーナス
司馬光 一佐。水陸機動団教官。コードネーム：女神。

《西部方面特科連隊》

ふなきいっつ
舟木一徹 一佐。戦車隊隊長。

《第三即応機動連隊》

つづみむねみち
堤宗道 一佐。連隊長。

やまさきかおる
山崎薫 三佐。中隊長。

●海上自衛隊

《第一護衛隊群》イージス護衛艦“まや”（10250トン）

くにしましゅんじ
國島俊治 海将補。第一護衛隊群司令。

うめはらめぐみ
梅原徳宏 一佐。首席幕僚。

えびはらめぐみ
恵比原恵 三佐。艦隊気象班長。

《第一航空群》

いせさきなもつ
伊勢崎将 一佐。第一航空群第一航空隊司令。

●航空自衛隊

・第三〇七臨時飛行隊

ひだかまさあき
日高正章 空自二佐。飛行隊隊長。

しんじょうあい
新庄藍 一尉。F-15EX “イーグルII” 戦闘機で驚異的なキル・スコア
を上げる。TACネーム：ウィッチ。

〈警戒航空団〉

とがわけいこ
戸河啓子 空自二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

●日本台湾交流協会

よだごころ
依田悟 台北事務所参与。民間人。

●コンビニ支援部隊

こまろみなみ
小町南 女子大生。中国語を勉強中のコンビニのアルバイト。

しもやまゆうすけ
霜山悠輔 桜会のコンビニの助っ人。190センチ近い大男。

ちねひとみ
知念ひとみ 石垣島出身で流ちょうな英語を話せる。

////◆アメリカ////

●空軍

エルシー・チャン 少佐。ハワイ州空軍パイロット・中国系。

////◆中国////

●陸軍

ジャンウェイソン
張偉森 陸軍少佐。調達部門。

ドンイミン
董衍 ドローンの設計が得意で航空工学の修士号をもつ。

ドンチンレイ
董慶磊 プログラミングが得意。

ドンサイフエイ
董賽飛 工作が得意で、フィギュアの原形師が趣味。

●海軍

〈南海艦隊〉

シーアン
・駆逐艦“西安”(7500トン)

チエンユイタン
銭語堂 大佐。艦長。銭国慶とは従兄弟されるが、実は兄弟。

・フリゲイト“南通”(4050トン)

チエンクワンチン
銭国慶 中佐。艦長。銭語堂の弟。

〈東海艦隊〉

フォーシャン
・075型強襲揚陸艦二番艦“華山”(40000トン)

タンドンミン
唐東明 海軍大将(上将)。東海艦隊司令官。

マ・チンリン
馬慶林 大佐。東海艦隊参謀。

・KJ-600(空警-600)

ハオフエイ
浩非 海軍中佐。空警-600のシステムを開発。

・ J - 35 部隊

フオツツジエ
火子介 海軍中佐。テスト・パイロット。

・ Y - 9 X 哨戒機

チョンクイロン
鍾 桂蘭 海軍少佐。A E S A レーダーの専門家。

《第 164 海軍陸戦兵旅団》

ヤオイエン
姚 彦 海軍少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤクトン
万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

チェンシユアイ
程 帥 中尉。技術将校兼雷炎大佐副官。

● S 機関

ツァンガオユエン
張 高遠 博士。深圳の極秘研究機関所属。

● S 上海国際警備公司

ワンカオイ
王凱 陸軍中佐。隊長。

フオジン
火駿 少佐。副隊長。

リウロン
劉龍 曹長。通信担当。

● その他

ウーレイ
呉雷 博士。若き気象工学の専門家。

//// ◆ 台湾 //

● 陸軍

《第 6 軍団》

フアイイーレイ
蔡 怡叡 中尉。司令部付き通信士官。

《第 10 軍団》

ライルオイン
頼若英 陸軍中佐。作戦参謀次長。

ファンジュエヤン
黄 九雲 中尉。所属中隊が全滅し、参謀部直属に移管。

《陸軍第 601 航空旅団》 = 別名 《龍 城 部隊》

ピンロンイ
平龍義 少佐。第 1 中隊長。

ランチャーリン
藍志玲 大尉。戦闘ヘリ・パイロット。コールサイン：マリリン。

タイエンゾーユイ
田 子瑜 少尉。新米士官。藍志玲大尉と前席射撃手として組む。

● 海軍

《第 168 艦隊》

ジェンインハオ
鄭 英豪 海軍大佐。艦隊司令。管轄は蘇澳。

トウオジアン
・沱江級コルベット二番艦“塔江”(685トン)

パイシー
柏旭 中佐。艦長。頼国輝とはライバル関係。

トウオジアン
・沱江級コルベット三番艦“富江”(685トン)

ツイクホフイ
頼国輝 中佐。艦長。海軍作戦本部参謀補佐。代々海軍の家系で、父は著名な海軍提督、姉は頼若英中佐。

モーリージン
莫立軍 少佐。副長。

●台湾軍海兵隊

アイアン・フォース
《第99旅団》=《鐵軍部隊》の愛称をもつ

チェンチーウェイ
陳智偉 海兵隊大佐。一個大隊を指揮する。

ホァンジュンナン
黄俊男 中佐。作戦参謀。大隊副隊長。フログマン部隊出身。

ウージンフォー
呉金福 少佐。情報参謀。

ワンイージェ
王一傑 少尉。台湾大学卒のエリート。予備役将校訓練課程出身。

リウジンロン
劉金龍 曹長(上士)。コードネーム：ドラゴン。

●独立愚連隊

チャイヅーチャオ
柴子超 伍長。コードネーム：ヘネシー。アルファ小隊を率いる。

グオイー
郭宇 伍長。コードネーム：ニッカ。ブラボー小隊を率いる。

ホーシヤン
賀翔 二等兵。コードネーム：ドレッサー。

ツイチャオ
崔超 二等兵。コードネーム：ワーステッド。

●その他

ライシホオチセオ
頼筱喬 陸軍臨時少尉。故頼龍雲陸軍中将の一人娘で、台北に飲茶屋を開いたが、徴兵に志願。

ワンウェンション
王文雄 海兵隊少佐。台日親善協会と国民党の対外宣伝部次長。

ガオフイカン
高慧康 医師。高文迪の父で外科医。

《桃園の郷土防衛隊》

リーグワンション
李冠生 陸軍少将。金門の烈嶼守備大隊の指揮官を歴任。

ヤンシージュン
楊世忠 少佐。軍歴三十年で孫もいるベテラン。

《国土防衛少年烈士団》

よだけんすけ
依田健祐 父親は日本台湾交流協会参与。私立中学校(国民中学)の生徒。

ガオウエンディ
高文迪 依田健祐の親友。外科医の父を持ち、クラスのリーダー格。

台湾侵攻⑨ ドローン戦争

プロローグ

賴筱喬ライシャオチャオは、ボランティア・グループの一人として手伝っていた防空壕での朝飯の片付けを終えると、地上へと出た。防空壕と言っても、ここ台北タイの防空壕はどれも巨大だ。地下鉄駅の延長あり、ビルの地下施設あり。

快適というほどではないが、それなりのトイレに換気設備、救護所に非常用電源も一部設営されている。ウクライナ戦争を受けて、それらの防空壕施設は総点検の上、さらに強化されていた。

今は、国外脱出し損ねた地方の住民や、解放軍が空挺降下して戦場と化した桃園地区からの避難民で、それら防空壕もごった返している。

日本よなぐにじま・与那国島への海路の脱出ルートは今も維持されていたが、二〇〇〇万もの国民をそのルートで避難させることは出来ない。空港は早くに攻撃され、空路は閉鎖されていた。

台湾空軍は、台湾本島の航空優勢を回復しつつあったが、それでも民航機が飛べる状況には無く、もちろん、国民全員を避難させる意思は総統府にはなかった。

誰かが、この島に踏み留まり、血を流して戦う必要があった。

空は、少し曇っていたが、太陽の在処はわかった。雨が降るような天気ではなさそうだった。だ

が、地上に出ても人影はまばらだ。総統府までほんの一キロもないこんなオフィス街ですら人影はまばらだった。

チャンシャージェ

長沙街二段の大通りには、所々大型バスが止まっている。夜通し、警備に就いていた郷土防衛隊の兵士達が、そのバスの中で仮眠を取っている。そのバスの所だけ、防空壕から外の空気を吸い出てきた人々で、人だかりが出来ている。バスの車体には、届いたばかりの壁新聞がガムテープで貼ってあった。

電気もラジオも、もちろんネットも使えない状況で、壁新聞のみが情報の拠り所だった。コンビニでプリントされ、ボランティアが走り回ってあちこちに貼っている。

昨夜の戦闘の状況がニュースだった。台湾半導体の中心部新竹での攻防や、大陸側に寝返った台中市への包囲作戦の開始、そして、桃園国際

空港を巡る少年烈士団の活躍が載っていた。

とりわけ、空港を守っていた少年烈士団の活躍は、白黒とは言え、写真入りで大々的に報じられていた。

半世紀前のM・16小銃を預けられた中学生らが、空港の何カ所かにドローンで降りてきたロボット犬相手に果敢に戦いを挑み、それを破壊したというニュースだ。

その破壊したロボット犬を前に記念写真に収まる少年たちのぎこちない笑顔が印象的だった。

ジュネーブ諸条約は、少年兵の戦闘参加を禁止していたが、総統府には、それを隠す意図も無かった。事実、台湾は、子供にも銃を持たせるしかない厳しい状況に陥っているのだ。

スマホでネイバータッチ・アプリを起動すると、すでにその話題で占められていた。もとは、日本で情報工作するために中国の情報当局が開発して

日本で流行らせたアプリだった。ブラックアウトした日本では、これが唯一の情報源となり、中国は、偽情報を流して日本の世論を煽った。今は、無害化されたものが日本から提供されて動いている。

スマホのワイファイ機能を使って情報伝達するピア・トゥ・ピア型のアプリだ。スマホの充電が出来て、人口がそこそこ密集している場所では便利に使える。時間は多少掛かってリアルタイムというわけにはいかないが、街の端から端まで、それで情報をやりとりすることが出来た。

今夜のイベントに関する情報も流れていた。高さ五〇九メートルを誇る東洋一の超高層ビル台北101ビルで、ライトアップ・イベントが行われるということだった。

日本がサイバー攻撃でブラックアウトした時、東京タワーに自家発電車を集めてライトアップし

て国民を勇気づけたのを真似してのイベントらしかった。

ジョン・フェル 中華路一段には検問所が出来ている。道路上には、一〇〇メートル置きに兵士が立っていた。

検問所で、手書きの出頭命令書を出して東側へと渡った。そこからほんの四〇〇メートル足らずで、総統府だ。道路の両側に防御陣地が作られ、戦車が何両も止まっていた。

視界に入るだけで二〇〇名前後もの兵士達が、総統府へと続く一本道に蠢うごめいていた。

台湾憲兵隊司令部に出頭すると、若い女性たちの行列が出来ていた。紙切れを見せると、「技能者はあっちだ」と指示された。

道路を挟んだ国軍英雄館のフロアに、徴募兵事務所が出来ていた。

テーブルがいくつも並び、ここでも、民間人が行列を作っている。ほとんどが女性だ。だが、憲

兵隊司令部側と違い、こちらは少し平均年齢が高そうだった。

紙切れを見せると、別室に案内された。無人の机に座って待っていると、初老の男性が現れて座った。軍曹の階級章を付けた退役軍人だった。

「ええと……、頼篠喬さん？」

頼は、手書きの履歴書を差し出した。

「日本の大学に留学後、しばらく向こうで仕事……。仕事は何を？」

「レストランの手伝いです。厨房から経営まで。帰国してから、観光客向けのレストランを開業しました」

「ほう！ その若さで。偉いね。商売はどう？」

「開店翌日に、戦争が始まりました」

「そりゃ気の毒だったね。日本語の特技があるというところで、実は通訳に困っている。軍の司令部で——、自衛隊さんのことだけで、お互い片言

の英語で意思疎通は出来ている。だが、ここ台北にも陸上自衛隊の部隊が配置されるとかで、現場部隊となると、お互い、酷い英語でやりとりする羽目になる。かと言って、インテリはみんな国外に逃げたし……、日本語が喋れる世代はほとんどが墓の中だ。一応、これは志願という形になるが、貴方は、アマゾネス部隊でも戦闘部隊を志願したんだって？」

「はい。父がずっと陸軍におりました。なので、抵抗はありません」

「あ、そう！ じゃあ階級章も読めるんだね」

「はい。軍曹——」

「それは大助かりだ。正直、ある程度は地理や台湾の習慣にも慣れている大卒の人間をサポート役として付けたいからね」

軍曹は、引き出しを開けて、陸軍少尉の階級章を出した。

「では、頼筱喬陸軍臨時少尉を任命する！ カウンターパートと対等に付き合うための階級だ。軍曹が士官を任命するのも変な話だが。ここ台北の戦いで自衛隊に出番はないから、君が戦場に向くことはまあ絶対に無い。自衛隊は台北見物して引き揚げることになる。いわゆるドグタグの類いは要らないと思うが……」

「父の形見のドグタグを首に下げています。血液型も同じですから」

「そう。上の階で、自衛隊から提供された女性兵士用の戦闘服がある。それに着替えて、道路を渡ってくれ。あのほら、釣り鐘がある所……」

「西本願寺ですね？」

「そうそう。そこから、要所要所を回る臨時バスが出ています。この紙を見せると、君専用のタクシニーに乗れる。そのタクシニーは、検問所を誰何無く通過できる。日本の部隊がどこに集結しているか

は実は私も聞かされていないんだ。だが、誰かが知っているだろう」

軍曹は赤字で「緊急、VIP！」と書かれたスタンプを押して手渡した。

「この戦争はどうなります？」

「ああ、もう勝ったようなんだろう」

軍曹は、満面の笑顔で上体を反らし、自信ありげに頷いた。

「空軍は制空権を回復したし、中国海軍は沿岸部に引き籠もったまま。そら米軍が出て来ないのは残念だったが、われわれは自力で敵を撃退した。

緒戦でここ台北を落とせなかったのが全てだったな。ウクライナと同じだ。敵はもう時間稼ぎ程度のことしか出来ない。だが、ロシアと違って資源も無い大陸は、経済制裁を喰らって何ヶ月もたらだら戦争は出来ないさ。われわれの勝ちだよ。貴方も不運だったが、来月には、商売を再開できて

いるさ」

軍曹は、最後に敬礼の練習をして彼女を送り出した。

筱喬は、微かに記憶していた。幼い頃、たまに制服を着る父親に向かって敬礼したことを。

別室で、陸上自衛隊のモスグリーンのTシャツや戦闘服を貰って着替え、階級章を付けてもらった。手伝ってくれた女性が、「あんたいきなり少尉とか、お医者なの？」と聞いて来た。

彼女には少し窮屈なサイズだったが、階級章を付けるとそれなりに様になった。血は争えない。軍人の子として、父が存命なら誉めてくれただろうか？……。あとは、軍で父を知っていた連中に見つからないことだ。面倒なことになる。

戦場に出ることまでは望まない。自分はそんな訓練は受けていないし、たぶん父ほどの覚悟もないだろう。だが、祖国のために働くのは、自分の

使命だと思った。周囲は、みんな戦っているのだ。自分だけ毎日、食料を運び、老人の世話をしているわけにはいかなかった。

南シナ海東沙島^{ドンシャードオ}への解放軍奇襲に端を発した戦争は、尖閣諸島へと拡大し、台湾全土への解放軍部隊の上陸という形で、すでに二一日目、三週間が経過しようとしていた。

日本はこの戦争に、徐々に介入し、台湾空軍と共に大陸本土への攻撃を敢行し、今では台湾本土に陸自水機団を展開させ、解放軍部隊と激しい戦闘を繰り広げていた。

第一章　ロボット犬

台北から南西四〇キロに位置する桃園国際空港は、台湾の空の玄関として発展してきた。南北に走る滑走路二本に、ターミナル1、2、3が挟まれるわかりやすい構造の空港だ。

二〇〇八年の、大陸とのいわゆる三通政策が始まって以来、大陸との窓口としても発展してきた。今は台北との高速鉄道も開通し、ますます栄えている。

開戦と同時に空港は閉鎖され、駐機していた旅客機も国外へと退避した。解放軍は、ここに弾道弾や巡航ミサイルを発射して、まず滑走路を潰し、次に空挺を降下させて奪取しに来たが、郷土防衛

隊の活躍によって、どうにか空港の敷地自体は守られていた。

その攻防はすでに二日以上続いていた。解放軍部隊は、日中は、空港近郊の民家や工場内に潜み、暗くなると仕掛けてくる。

台湾軍には、日中にローラー作戦を掛けて敵を殲滅^{せんめつ}するような余力は無く、ひたすら郷土防衛隊を立て籠もらせることで守っていた。

昨夜は、民間軍事会社の傭兵部隊と、空から降りてきた軍用ドローンで危うい所だったが、駆けつけた海兵隊部隊が間一髪間に合って救われた。

立て籠もる兵士たち、そして少年兵らは、毎晩、

命からがらの厳しい状況に置かれていた。

少年烈士団は、二日前は、流れ弾が飛び込んでくる陣地の中で一晩怯える羽目になり、ついに昨夜は、空港敷地を守るための塹壕に入らされ、ロボット犬と撃ち合う羽目になった。

そのロボット犬二台を倒した私立中学生からなる少年烈士団の面々は、夜が明けると、ただっ広い滑走路エリアで、倒したロボット犬を前にして記念写真を撮り合った後、第1ターミナル・ビルに引き揚げ、まず泥だらけの服を着替えた。

滑走路に沿うように掘られた塹壕には水が出て、膝下はずつとどろ沼の中。すでに塹壕足状態の子供もいた。

濡れた靴の代わりは無かったが、乾いた靴下とサンダルがあった。そして、一階の出発ロビーに降りて、ようやく朝飯となった。

そのロビーでは、昨夜、ロボット犬が一頭侵入

して殺戮を繰り返した。まだあちこちに飛び散った血痕が残っていた。

酷い夜で、皆空腹だったが、まだアドレナリンがうまくついているせいで、食欲はたいして無かった。皆、栄養ゼリー一本で十分だという感じだった。

郷土防衛隊を指揮する李冠生^{リーグワシヨン}陸軍少将が現れ、少年たちを励まして回った。

「昨夜はご苦労だった！ アメリカ大陸は丁度、夕方から夜だが、三大ネットもCNNも、君たちの話題で沸騰しているそうだ。総統府からは、帰国して戦闘参加を希望する在米台湾同胞たちの電話が増えているという報告が届いている。それと、昨夜、あの塹壕には、何校かの生徒たちが陣取っていたが、逃げずに戦うことを選択したのは、君たち私立学校の諸君達だけだった。君たちは、将来の台湾リーダーたる資質を備えている！ 非常

に危うい戦いだった。私は、第一報を聞いた時に、塹壕に死屍累々と横たわる君たちの姿を想像して心臓が止まりかけたよ……。だが、非常に機転の利いた、見事な戦法だった。恐らく、われわれもその戦法を取り入れることになるだろう。

日本人少年！——、依田健祐君よ。よだけんすけ総統府からとりわけ、君個人に、感謝の言葉を伝えてくれることだ。個人的にも、君の機転の良さにみんなが救われたことに感謝したい。君が台湾国籍を選択するならば、士官学校にも入れるし、日本国籍を選択しようが、台湾大学でも、望む大学への入学許可が与えられるだろう。だが、まずは生き残ることが大事だな。気分はどうだ？」

「あの……、僕らいつまでここに？」と健祐は正直に尋ねた。

「なんだ！ 情けない。英雄が口にするのか？」

待合室の長椅子で健祐の隣に座る高文迪ガオウウェンディ少年が肩を小突いた。昨夜の戦いは、健祐の機転で救われた。相手がロボットだとわかると、フレイム問題を起こして判断ミスを誘い、その隙に攻撃すれば良いと提案したのだ。結果、全員で塹壕の中に身を隠したまま発砲してマズル・フラッシュで囷となり、AIが判断に迷っている隙に撃ち倒した。

「それはもつともな質問だ。幸い海兵隊の増援が入り、ここは安全になりつつある。海兵隊がいつまで留まってくれるかこれから協議するが、昨夜のようなことはもうないだろう。ここは居心地は良いが、戦場であることには変わりないので、なるべく早くに後退できるように手配する。君たちは十分に戦ってくれた。感謝の言葉しかない。しばらくは興奮して眠れないだろうが、とにかく、ゆっくりしてくれ。それと、食い物は食える時に

食つておけ。それが戦場の鉄則だ。次の食事も得られるとは限らない」

李將軍は、海兵隊の指揮官が正面ゲートから現れたことを視界の端に捉えると、少年らに向かつて仰々しい敬礼をしてその場を去った。

海兵隊《第99旅団》Ⅱ《アイアン・フオース鐵軍部隊》の愛称を持つ

兵士たちは、この戦争で最も長く戦っている部隊だった。東沙島では、解放軍の奇襲上陸を迎え撃ち、島の端っこに立て籠もった後に、海上自衛隊と味方潜水艦の二隻に分乗して島を脱出した。

「キスカ作戦」と命名された脱出作戦は見事に成功し、彼らは英雄として迎えられた。そして、台北北部で、養生を兼ねた部隊再編中に、東沙島で相まみえた敵がまたも現れ、激しい交戦となった。後に、シタン・シナイ淡水の戦いと呼ばれることになる戦闘では、たまたま近所で隠退生活を送っていた李

冠生大佐が、郷土防衛隊の指揮を取ることになり、海兵隊と共に敵を撃退したのだった。背広姿のまま戦った李は、その淡水の戦いの英雄的指導者だった。

海兵一個大隊を指揮する陳智偉大佐は、李にむかつて、「昇進お目出度うございます！」と敬礼した。

「皮肉は止してくれ」

「いえ。貴方こそ、前線部隊を率いるに相応しい人物です」

「王少尉の派遣に感謝するよ。しかも迫撃砲部隊まで付けるなんて、至れり尽くせりの慧眼だ。海兵隊を見直したよ。君らはここに留まってくれるのだろうね？」

「そのことなのですが、少し複雑な事情があります」

李は、一行をターミナルの端っこにある指揮所

へと案内した。作戦テーブルの上には、昨夜捕獲した軍用ロボット犬「ケルベロス」が二体乗っていた。一体は、リチウムイオン電池に火が点いて真っ黒焦げだった。もう一体も、胴体部分はへこみだらけ、銃痕が無数にあった。

「これが噂のケルベロスですか……」

「このターミナルに押し入り、殺戮しまくった。

しかし後ろから兵士が抱きついて羽交い締めにしてどうにか電源を落とした奴もいて、それは全く無傷で鹵獲できたので、朝一で台北へと送ったよ。
ヤンシージョン
楊世忠少佐、説明してやってくれ」

「はい。この黒焦げになったのは、空港南東端に降下して、少年烈士団を襲った奴です。少年が撃った弾が、まず関節部分に命中し、動きが鈍くなったところを更に銃撃、最後はリチウムイオン電池に火が点いて燃え上がりました。この穴だらけの一体は、こちら側で、陣地の中に飛び込んで来

た奴です」

「こんなに何十発も喰らわせなければ倒せなかったのですか？」

「いえ、致命傷を与えた後に、殺気だった味方が十字砲火を浴びせたせいです。子供たちの方が遥かに冷静だった。首のヘッド部分から、測距用の赤いレーザー光を出して威嚇します。別に可視光線にする必要はないはずですが、あれは恐怖でしたね。自分がSF映画の中に放り込まれたような恐ろしい経験だった。子供たちは、身体も銃口も塹壕に隠れたまま、空へ向かって銃を連射し、その大量のマズル・フラッシュでロボット犬のAIを幻惑させている隙に、他の数名が連射することでこいつを倒しました。次からは、われわれもそれを真似るよう、すでに命じてあります」

「なるほど。咄嗟の機転で、中学生がそんなことを思い付いたのですか？」

「若者ならではありませんね。われわれみたいなジジイには無理です」

李將軍は、ボールペンのペン先でロボット犬を突きながら「こちらで駆逐したロボット犬は合計六体……」と口を開いた。

「二七名が戦死、うち二人は少年と教師だ。一〇〇名近くが負傷、戦線復帰不能なレベルでの負傷だ。恐らく、数体が空港からどこかに逃げたはずだ。情報部からの報告では、あちらのメーカーはまだ一〇〇体前後を持っているらしい。ほら、ここを見てくれ。背中に窪みがあるだろう。首を折りたたむとすっぽりこのへこみに収まる。逆関節型の四本足は全て折り畳み式。つまり、このケルベロスは、脚と首を折りたたむと、ただのボックス型の荷物になる。弁当箱のように折り重ねての空輸も可能な作りになっている。今回はたまたま一体ずつの空輸だったが、次はわからない」

「リーダーには引つかからなかったのですか？」

「ドローンは海面すれすれを飛んで来た。しかもあのサイズであの速度だ。戦闘機のリーダーは、大型の鳥かノイズだと判断したらしい。ところで、君らが手こずった姚彦ヤオインの敵部隊はどうなったんだ？ 投降でもしたのか？」

「消えました。そろそろ、負傷兵などの残存部隊が投降してくるはずですよ」

「消えたとはどういう意味だね？」

「恐らく、新竹に兵や弾薬を補給している潜水艦を利用してあるのでしよう。旅客機サイズで、中隊規模の兵を楽々と収容できるのでは？ という噂ですよ」

「初耳だな」

「そうですね。自分もびっくりです」

その潜水艦による脱出を昨夜見届けた陳大佐は、何喰わぬ顔で言った。そして、ホワイトボードに

貼られた白地図の前に移動した。

「それで、その潜水艦で脱出したらどう敵ですが、恐らく本国へは引き揚げずに、今も、沖合を移動中のはずです。基隆キルンから東は、十分な哨戒活動がなされているので、潜水艦が行動出来る余地はない。問題はこちら側で、航空優勢を確保したとはいえ、哨戒機が飛び回るのはまだ危険です。その接近は、目視で警戒するしかない。日中の接近上陸はないと思いますが、わが部隊は、淡水河口南岸より、新竹手前までの五〇キロの沿岸警備を命じられました」

「五〇キロの海岸線をたったの一個大隊で？」

「郷土防衛隊はいますし、道路は生きている。それに、新竹周辺は、自衛隊を含めて味方部隊が大勢展開している。淡水河口付近は陸軍が展開しているの、実際は、われわれはここ桃園を中心にして沿岸部を守ることになります。なので、ご迷

惑でなければ、われわれも近くに指揮所を開設させていただきます」

「それは有り難い。なら、空港東端の警察詰所を使ってくれ。あちら方向がどうも手薄だね。例の上海国際警備公司の傭兵が潜んでいるのもそっちだ。昨夜もそこから攻められた」

「了解です。ただ、次の空挺作戦があった場合、われわれの戦力だけでこの空港を守り切れるかどうか……。ロシアはキーウ攻略で早々と空港制圧を放棄しました。あれは戦術的に大失敗だった。制圧できるまでしつこく兵力の投入を続けるべきだったと、解放軍の論文で書かれたものを読んだばかりです。恐らく敵は、この空港の奪取を諦めないでしょう」

「私も同感だ。台北の連中は、ここの防備をわざと薄く見せつけて敵を挑発している。実際に薄いのは事実だが。新竹の方はどうなっているか聞い

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。